

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

高等学校レベルのL3教育：  
集中講義形式のスペイン語教育を通じた  
英語能力の向上とグローバル人材の育成

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: KISHIDA, Saori メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2551">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2551</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 論文内容の要旨

学位申請者氏名 岸田 早織

近年、国境を越えた人や物の移動が活発になり、日本国内でも多種多様な言語や文化、習慣をもつ人々が共存できる社会の実現に向けて、グローバルな環境に適応できる人材の育成が早急に求められている。グローバル人材であるための必要条件の一つは、現代の *Lingua Franca* である英語を不自由なく操ることであろう。そのような状況下で日本の英語教育も変化の時代を迎えている。しかしながら、日本の高校生の英語力を他の国のそれと比較すると、十分なものとはいえない。そこで筆者は、その形態統語的、音韻的特徴から、スペイン語学習を通じて英語の運用能力の向上を図ることができるのではないかという仮説を元に、いくつかの実験を試みた。本稿では上記の実験の結果を考察し、スペイン語学習を通じた英語運用能力の強化・向上、そしてグローバルな視点を持った人材育成を目的とした言語学習プログラムの提案を行う。

1.1 では本研究の背景となる、日本の英語教育について論じる。白井(2012)によれば、日本の外国語教育における課題は大学入試制度やクラスサイズ、教員の指導力など多岐にわたっているが、本稿では特に日本の高校生の英語力の低さを問題として取り上げる。文部科学省発表の平成 30 年度「英語教育実施状況調査」の結果によると、CEFR(外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠)の A2 レベル(英検準 2 級)相当の英語力を有するのは高校 3 年生の 40.2%にとどまっている。平成 30 年 6 月に閣議決定された「第 3 期教育振興計画」では、高等学校卒業時に CEFR の A2 レベル相当以上を達成する生徒の割合を 50%以上にすることが目標として掲げられているが、これまでのところその目標は達成されていない。1.2 では本稿で使用する用語の解説をするとともに、第二言語(L2)習得および第三言語(L3)習得に関する先行研究を紹介する。これまでの L2 および L3 習得研究の多くは、L2 が L3 に与える影響や、母語が L2 に与える影響といった、既習の言語が学習言語にどのような影響を与えるかという方向性の研究が主流であった。つまり、日本人が研究対象であるか否かにかかわらず、L3 が L2 に与える影響についてはこれまでに詳細な研究がなされていない。そこで本研究では、L3 が L2 に与える影響に関するケーススタディとして、日本人の学習者を対象に L3 であるスペイン語の学習が L2 である英語の運用能力にどのような影響を与えるかを調査する。

本論の主体となるのが第 2 章である。2.1 では多くの日本人学生にとっての L3 であるスペイン語学習が、L2 である英語能力の向上・強化に繋がるのではないかという、本稿の仮説について詳説する。多くの日本人が L2 として学ぶ英語は屈折語に分類されることが多いが、その歴史的背景から冠詞、数の形態、動詞の活用などの変化が明確に示さ

れず、それらの形態素を持たない日本語を母語とする者にとっては習得するのが難しいと言われている。一方で、本研究で取り扱うスペイン語は英語に比べて形態統語の特徴が視覚的・音韻的にはっきりと現れる。スペイン語学習を通して、言語構造の理解につながる気づきを促し、英語運用能力の向上・強化を目指すというのが本研究の仮説である。

上記の仮説を踏まえ、筆者はスペイン語学習が学習者の英語力に与える影響について調査することを目的とした計 5 回の実験を行った。実験では英語レベル診断テストを用いて、L3 学習開始前後の学習者の英語力を比較した。2.2 では実験結果を詳細に分析する。1 つ目の実験(予備実験)は神戸市外国語大学でスペイン語、もしくは中国語を専攻言語として学ぶ 1 年生を対象に行われた。予備実験の結果から、L3 としてスペイン語を学習した学生のデータから、いくつかの形態素に関するエラーの改善が確認された。予備実験の結果を踏まえ、筆者はその後計 4 回にわたり、高校生向けのスペイン語講座(Spanish Camp)内で同様の実験を実施した。全ての実験の結果を総括した結果、スペイン語学習を通して英語のいくつかの形態素の理解が深まると考えられる。特に定冠詞、そして人称および数の一致に関するエラーの改善が顕著となった。本研究で実施した計 5 回の実験については、データ数も少なく実験的研究段階にあるため改善の余地はあるが、今回の結果が日本における英語以外の外国語教育の地位向上につながるきっかけとなることは確かであろう。

2.3 では日本の高等学校レベルのスペイン語教育の現状について、筆者の修士論文(Kishida 2017)を参考に論じる。2.2 での検討の結果、L3 としてのスペイン語学習を通して英語力の向上・強化が期待できるということがわかったが、日本の高等学校教育においてはほとんどの高校生がスペイン語学習の機会を得られないという現状がある。文部科学省が発表した「平成 29 年度高等学校等における国際交流等の状況について」によれば平成 30 年(2018)年 5 月 1 日時点では、全国の 96 の高等学校で 2863 名がスペイン語を履修していたという。ここ数年の調査ではスペイン語を開講している高校数は減少傾向にある。Kishida(2017)で筆者が実施したアンケート、インタビュー調査によると日本の高等学校レベルのスペイン語教育が普及しない理由の一つとして、日本の大学入試制度のあり方が挙げられた。そこで 2.4 では日本の英語教育の軸となる大学入試制度、またその変容について文部科学省が発表している最新情報を整理した上で考察を行う。日本の多くの高校生が英語を L2 として学んでおり、大学入試において英語を必須科目としている大学が多いことから、日本における高等学校レベルの「外国語教育」は多くの場合「英語教育」とほぼ同義として扱われている。大学入学者選抜大学入試センター試験(センター試験)では現在、「外国語」教科として英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の 5 言語から一つを選択することが可能になっている。本稿の主題となっているスペイン語はこれまでのところ選択肢には入れられていない。2012 年 7 月 12 日にはセルバンテス文化センター東京が主導となり、大学入試の「外国語」における選

択言語の一つとしてスペイン語の導入を要請する書簡が提出されたが、これまでのところ実現には至っていない。文部科学省が提唱する「高大接続改革」によって変化の時を迎えているセンター試験だが、英語以外の外国語の扱いについての詳細は発表されていない。今後も文部科学省や大学入試センターなどの動向を追うことが必須となるだろう。

第3章では集中講義形式(intensive)の外国語教育について論じる。日本における集中講義形式(intensive)の外国語教育は、高等学校教育の現場ではまだ一般的なものとはなっていない。しかし、大学レベルでは桜井(2015)や伊木(2018)、メイビン(2017)など複数の取り組みが報告されている。Seamon(2004)によると集中講義型のコースは通常のコースと比較した場合、「より良いスタート」と切るのにはふさわしいが、長期記憶には繋がりにくいという性質を持っている。このことはBahrick and Hall(2005)が行った実験結果からも証明されている。つまり集中講義形式のL3教育は、大学入試に必須ではない科目に多くの時間を費やすことができない日本の高校生に最適の言語学習形式と言えるのではないだろうか。3.3では筆者が行った高校生向けのスペイン語講座(Spanish Camp)の特徴を解説する。Spanish Campは、スペイン語を学ぶ機会の少ない高校生にスペイン語学習の機会を与え、スペイン語学習を通して学習者の英語力の補強・向上を図ることを目的に実施された高校生向けの集中講義形式の外国語講座である。神戸市外国語大学でこれまでに4回実施されたSpanish Campでは、コミュニケーション・アプローチあるいはコミュニケーション・ランゲージ・ティーチング(CLT)とも呼ばれる外国語教育のアプローチをベースとし、集中講義形式の講座用に改良を加えた教案を使用している。講座内では学習言語(スペイン語)のみが使用され、音声スキルに限定した指導を行う。講座で使用した教案は付録として収録している。3.4では日本の外国語教育の現場で実際に使用されている「外国語教育のめやす」やCEFRと、Spanish Campの教授法の比較を行う。

第4章では第1章から第3章までの内容を総括し、日本の高等学校レベルの外国語教育の今後の展望を、高大連携の視点を交えて考察していく。大学における英語教育の前提として、入学以前に学習した内容をより深めるといふことがあるだろう。しかしながらL3教育においては、大学入学以前に学習経験のある学生の数が多くないことから、高大連携があまり進んでいないと言える。長谷川(2014)、山崎(2014)によれば、高等学校におけるL3教育をより普及させるためには外国語教育の高大連携は必要不可欠なものであるという。一方で、寺尾(2017)は大学に進学しない高校生にとっても、高等学校教育におけるL3学習は大きな意味を持っていると述べている。日本国内でも外国人とのコミュニケーションを必要とされる場面が増えている現状がある中で、日本から海外へ向かうグローバル化だけでなく、日本国内でもグローバルな視点を持った人材が必要とされる時代がやってきている。英語以外の外国語教育を推進していくことで、

言語の背景にある複数の文化を理解できるグローバルな人材を高等学校レベルの教育から育成していくことが可能になるのではないだろうか。集中講義形式(intensive)のスペイン語教育は今後の日本の外国語教育を変える可能性を秘めていると言えるだろう。そのためには、今後より効率的な教授法や授業プランを考えていかなければならない。

付録として 2018 年 8 月に実施した高校生向けスペイン語講座「Spanish Camp」で、実際に使用した教案を収録している。付録では、講座で使用した教材や各文法項目の指導方法、講座内で行ったアクティビティについても詳細に説明した。本研究の目的の一つは、日本国内のより多くの高等学校でスペイン語教育(特に、集中講義形式で行う 2 週間程度のスペイン語講座)を提供することである。本付録は今後、教案を具体化していくためのパイロット版としての意味を持っている。